千葉市を事例とした「スロースペース」の視点からみた市街地のオープンスペース特性

A Case Study on Urban Open Space from the Viewpoint of Slow Space in Chiba City

木下 勇* 中村 攻*

Isami KINOSHITA Osamu NAKAMURA

Abstract : This study aimed at analyzing urban open space from the view point of "Slow Space" which was introduced by Bell & Leong in their architectural review. At the first, this study has extended the definition of "Slow Space" according to the past philosophical ideas about "Time", "Space" and "Human Existence". It revealed the importance to see the urban open space from this definition to revive the subjectivity of human beings to the environment. From the case study of the research by questionnaires, interviews and workshops in Chiba-city, some characteristics of "Slow Space" were found: such as natural open spaces, waste land, declined shopping street, topology of redevelopment project, etc. Residents are passive to those environmental change but they may revive their subjectivity to those open space (Slow Space) reminding their mental temporality from some remaining parts of those spaces and their memories accompanied with an effect of dramaturgy.

Keywords: *Slow Space, Open Space, Temporality, Subjectivity, Urban Renewal Project*

キーワード: スロースペース, オープンスペース, 時間性, 主体性, 市街地整備

1. はじめに

都市の空間的構造が産業経済の影響を強く受ける我が国においては、都市生活を豊かにする公共的なオープンスペースの創出は、どちらかといえば、二の次的に扱われてきた。これまでの都市計画事業によって生み出される空間、特に市街地の広場の空間においては、人々の滞留や自然の取り込みなど快適な都市空間を営む要素に欠けると指摘されている¹⁾。「スロースペース」とは Michael Bell & Sze Tsung Leong らが建築・都市批評として提起した概念であり、それは建築評論の形をとりながらも現代文明、現代都市の批評の概念装置として提起されている²⁾。ここではこの概念に都市の空間を豊かにする示唆を得てそれを拡張して市街地整備に適用する（以下、本論文においては単にスロースペースと記述する）。市街地整備事業によるオープンスペースの既往研究をみると、公開の空地に関してアメニティー評価を計画者に聞いた研究³⁾や、滞留の広場という視点から形態や利用実態、管理運営に関する言及⁴⁾もある。また、全国事例を対象に全体像を概観し、公開の空地の類型化を試みた研究もある¹⁾。しかし、時間と空間とを絡めた人間の存在との関わりで捉えたものではない。時間と空間を現象学的な視点からみた研究では産業廃墟の景観を扱った研究⁵⁾があるが、市街地整備を扱ったものではない。

研究の組み立ては、以下の通りである（図1）。まずはスロースペースという概念を既存の哲学概念と照らして整理する。続いてケーススタディとして千葉市を例にとりあげ、スロースペースの視点からみた都市のオープンスペースの特性を把握し、市街地整備におけるオープンスペース整備のあり方を検討する。方法論的に配票調査で概略をとらえ、市街地整備に関わる具体的な地区を対象にワークショップを実施し、スロースペースの空間特性に対する検討を行ない、平行して行政、関係機関、および市街地整備に係った住民への聞き取り調査を行なった。調査の概要は表1の通りである。

千葉市を対象としたのは以下の理由による。政令指定都市なが

ら、大都市東京圏にあり、今後の都市空間整備では地域の独自性の発揮が課題であり、古くからの市街地中心部と新規開発地区の特徴ある都市空間を有す。また海岸部や河川、農村部など周辺自然環境にも近接し、スロースペースという時間性の面からオープンスペースを見ることが地域性の発揮につながりえる可能性を持つ。さらに調査者が定期的に観察しやすい範囲の中に位置する。

2. 都市空間におけるスロースペースの認識論

グローバリズムの名のもとに競争原理が蔓延しつつある状況の中で、アンチテーゼとして「スロー」の冠をかざした言葉が提起されている。スローフード、スロー・イズ・ビューティフル⁶⁾などである。スローフードがファーストフードに対抗して提起されたのは反グローバリズムであり、食そのものを楽しむ、食を通しての自分と世界との関係を問い直す意味という⁷⁾。それをコンヴィ

図-1 研究フロー

表-1 調査概要

ワーク	開催日	参加者数	配票調査	配付	回答数
ショップ			JCを通じた面接及び郵送 2000.10	100	68
中央地区	2000.10.8	13名	千葉大学学生への配布回収 2000.11	100	71
幕張新都心	2000.10.21	6名	聞き取り調査 2000.10-2001.2		
旧幕張地区	2001.2.18	27名	行政	6課/係	10人
弁天地区	2001.3.23	10名	地域住民/専門家	11団体	16人

*千葉大学園芸学部

ヴィアリティ(I.イリイチ)の概念であるが、共に食べるという関係性をここで言う)として説明し、辻⁸⁾はスローにエコロジカル、サステナブルな意味を付加する。このBell & Leongらのスロースペースも米国主導のグローバリズム批判を展開し、次の2種類の方向性に着目してスロースペースを提起した。一つは広い意味で、資本主義的活動、経営システム、権力など無意識に、またはほとんど目に見えないレベルで基盤構造が残る都市の分析である。二番目は資本の領域とは正反対の方向に、時間的な広がりを示す建築の可能性である。彼らの編集による本の構成は前者で言えば、土地所有の問題や未利用の空地、荒廃地、アモルフォスな空間など、都市の光があたらない影の部分にスポットを当て⁸⁾、また後者の建築作品やプロジェクトの紹介では静止や静けさ、位相差を強調した例が提示されている⁹⁾。

ここではBell & Leongのスロースペースの概念をより拡張して、時間とりわけ速度と空間の側面から都市空間を人間存在との関わりで再検討する道具としてとりあげてみる。

スロースペースは速度と空間が合わさった概念である。その点で時間を空間化して認識することを批判し、時間は遅延そのものと持続性を提起したベルグソンに通じる¹¹⁾。ミンコフスキーは空間と時間の対立よりも概念と「生きられるもの」との対立であると提起した¹⁰⁾。週ればカントの「感性の二つの純粋形式であるところの空間(Raum)と時間(Zeit)とが、ア・プリオリな認識の原理」と言う根本にたち返る¹²⁾。「生きられる」は主体の認識にかかり、ハイデガーの言うところの「時間性は関心の存在意味」¹²⁾ともいい、その存在の了解(Verstehen)は「存在は、それがなにかへ向けて企投(Projection)される限りでのみ了解される」¹⁴⁾という点にかかる。このような世界内存在への認識のアプローチはスローフードが食を通じて自分と世界との関係の認識に意味を見出すという点を十分に説明するものである。「時間性というのは根源的に『脱＝自』それ自身なのです」¹¹⁾とハイデガーは言い、将来、既在(過去)、現在という特性づけられた諸現象を、時間性のもろもろの脱自態(エクスターゼ)と名づけた¹⁶⁾。その脱自態から見通す地平、脱自態とともにあらわれる地平(包み込む空間)を脱自場(エクステーマ)という¹²⁾。スロースペースも本質的にはこの脱自場に近いであろう。

主体の関わりという点ではハイデガーは関心(Sorge)といい、これはホワイトヘッドの「感じ(Feeling)」¹³⁾やサルトルの「アンガー・ジュマン(投企、参加)」、メルロ・ポンティの「身体/知覚」等とともに現象学的還元のキー概念として、主体の回復のための重要な概念装置ともなる¹⁴⁾。

さてこのような現象学的還元から都市計画概念へ提起したものではケビン・リンチの『時間の中の都市』が想起される²¹⁾。その中でリンチは「内部の時間」というキー概念を用いている。『都市のイメージ』²²⁾で人の経験や愛着といった内面の空間を解きあかしたリンチはまた内面の時間をも視野に入れていた。また遺作となった『廃棄の文化史』²³⁾は今日の環境問題とも絡み合う、「モノの時間性」を問い直す。それは汚染物質に対する自然環境の浄化能力による速度には一定の限界があり、許容量以上のモノは処理できない、というような環境時間²⁴⁾の概念とも重なりあう。

リンチの「内部の時間」もハイデガーの「内部時間性」に、また週ればカントの「時間は内感の形式」に根拠を求めることができる。このことは、カントを批判対象とし、ジェームズに依拠しながら、「純粋経験」なる概念を『善の研究』で提示した西田幾多郎が『場所』で論じた「超越的意識の野」にもつながる¹⁵⁾。

また、和辻哲郎は「時間と空間との相即不離が歴史と風土との相即不離の根底」とし、その「主体的肉体性」の自己展開を「風土性」と捉えた¹⁶⁾。

その身体性への視点は既に西田の論文『場所』にも見ることが

できる¹⁷⁾。西田は知覚、思惟、意志、直観の意識作用の統一の他に、記憶、想像、感情なども視野に入れる必要性を認識して、包摂判断という根本的な認識の行為をいう¹⁸⁾。この包摂にホワイトヘッドの抱握は類似し、こちらは「子どもの時の精神は自然的である」という記述があるように、身体的、ドラマトゥルギー的な抱握とも言える。それは西田が追究した「無の場所」、「矛盾的統一の述語面」や「絶対矛盾の自己同一の世界」とも重なりうる。

スロースペースを単に批判の概念装置にとどめず、都市計画概念に昇華させることがここでの意図であるが、以上みたようにそれは主体の認識とも深く関わる主体形成論にも展開する。都市の空地や空隙が、空気、遊びとして必要であると言うことは可能であっても、それらの空間がデッドスペースにならず意味を持つためには主体の認識が重要である。科学技術の進展によって生み出された利便性、豊かさの消費社会の構造において人間疎外、主体の喪失に陥る状況はボードリヤールが指摘し³²⁾、または古くはトクヴィルが予言した³³⁾ことでもあり、現代哲学の主要課題でもある。「無」(西田)や「差異」(ポスト構造主義)、「無常」(ホワイトヘッド)などの概念装置は、ニヒリズムや虚無感と紙一重で表裏の関係にあり、主体の克服には身体的、ドラマトゥルギー的な意識化により、関係性を再構築することが求められる。

以上からスロースペースは次のように言えよう。

<速度と空間の合わさった概念であり、歴史、風土など地域性の位相差による相対的な遅延の知覚が、人の「生きられる」経験等身体的内部にも働きかけ、世界(環境)との関わりの主体性を喚起するドラマトゥルギーの抱握が契機される空間>。

これを平たく言いかえると次のようになる。

「都市の空間(ここでは公的な外部空間を対象とする)において、人々がゆったりとした時の流れを感じ、環境に関わる(前主観的な)主体性が契機される(ドラマトゥルギー的)空間」

3. ケーススタディ

(1) ワークショップによるスロースペースの発見

ワークショップでは身体の動きのドラマトゥルギーの効果、集団の相互作用による、課題への接近をより深めていくことが可能となる。前述の認識論においてもスロースペースは「関心」、「感じ」、「身体/知覚」といった主体の意識化が重要となるために、ワークショップは適している方法といえる。それは参加者からワークショップ後に寄せられた次の感想にも表れている。

「長年千葉に住みつつ、自分の街で見落としていることがこんなにもあるということ。それがちょっとした意識のありかたによることを感じる事ができました。・・・街を歩くときに、時間の感じ方に感覚を置いてみたり、また、子どものころ遊んだあたりを歩いてみたりしています」(20代女性)

この表現にもスロースペースという視点を持って都市の空間を見たときに身体的に内部にも働き、環境との関わりの主体性が喚起されるドラマトゥルギー的效果の表れを見ることができる。

ワークショップは「スロースペースを探そう」というテーマで参加者を募集し、開催した。対象地区は市街地整備との関連で選定した次の4地区である。千葉駅前から中央公園、栄商店街などを含む『中央地区』、千葉公園を有す『千葉弁天地区』、幕張新都心整備に絡んで『幕張新都心地区』と当初は玄関口として再開発が予定されていた『旧幕張地区』である。ワークショップの開催にあたり、NPOや地域団体を通じてちらし配付およびインターネットメーリングリストで掲示して参加者を募集したが、当日の参加者数は幕張新都心地区や弁天地区は少なく、それは参考程度にとどめ、主として中央地区および旧幕張地区という市街地再開発事業も絡む地区を中心に分析する。

参加者には地区内を歩く前に前述の概念定義を示し、その説明

表ー2 「スロースペースを探そう」ワークショップの個人の記述とグループの順位づけ

(1) 千葉市中央区

○ポジティブなスロースペース (件数欄①②③は参加者グループの順位づけ)

類型	対象	件数	具体的な記述内容
公園	通町公園	6	・公園内のオブジェは一部が椅子がわりにもなっていて、中に溶け込めるホッとできるスペースになっている。
		③	・通町公園。ハトの周りに人が集まる。人の周りにハトも集まるけど…。いい感じ…。
	中央公園	3	・中央公園。お年より？の男性が数名座り込んで将棋をしていた。
神社	千葉神社	5	・神社の裏通りに池や橋があって、心が落ち着く。
		①①	・境内は狭いが街中でのホッとできる空間。
	弁財天	2	・弁財天。数百年の前からの霊地を感じさせるポイント。
駅前広	駅前	4	・駅前。汚い高架下？(線路下)だが、若いストリートミュージシャンがいて、良い空間を作っている。
		②	・駅周辺のちょっとしたベンチ、緑が買い物などで疲れた人々の休める場所となっている。
店舗	栄町コンビニ	4	・よいコミュニケーションがゆつくりとれる場所はスロースペースと感じた。
		②	・コンビニのレジの青年とコミュニケーションがとれた。(韓国の食材の話など) いいコミュニケーションのとれる場所。
商店街	店舗(富士見町)	3	・夕方5時～午前3時回転のショットバーの店の前にベンチと大きなディスプレイの人形が…。店もシャッターを下ろしていないのでなかなか良い雰囲気。
	千葉銀座通り	1	・中央銀座通りは親子三代夏祭りやフリーマーケットに利用され、活気がある。
	富士見町	③	・裏通り。家本ビル裏側のとおりは細いわりに人通りも多く、活気がある。
栄町		②	・栄町商店街。ハミングロードパルサの通り沿いにある韓国関係の食べ物を出すお店はまた入ってみたい。
		②	・ガード下の飲み屋、屋台通り。夜になると人の声が溢れる場所に。
河川	屋台通り	1	・川に沿って気楽に歩ける場所です。
	腹川	3	・鷹匠橋。徳川家康のことから歴史。椅子も陶製。
建物	交番	2	・駅前交番の形がユニークで楽しめる。
	栄町ビル	1	・壁面につたの緑が鮮やかでホッとできるスペースになっている。
大型店	そごう	2	・千葉そごう。そごうのワキの水のせせらぎがいい。
	地下通路	2	・地下の照明が美しく不思議な空間。

●ネガティブなスロースペース (件数欄①②③は参加者グループの順位づけ)

類型	対象	件数	具体的な記述内容
商店街	栄町	13	・栄町のメインストリートはシャッターを開けた店が多く寂しい。コンクリートに囲われた空きスペースも違和感がある。
		①②	・栄町の裏通りが、道幅がけっこう広いわりに静かで、夜の街の姿という感じで不思議な感じがした。
	富士見1丁目	5	・使えない土地を花壇にしているが、ベンチでもあれば、腰かけて眺められるのに。
公園	富士見町2丁目通り	3	・富士見2丁目通り。ただでさえ、人通りが多いのに、狭い歩道+路上駐車+お店の看板。ベリービジーだね！
	院内	2	・昔ながらの街並みでよいけれど、さびれているのでなんとかして！
	通町公園	8	・弁財天となりの公園。古く土地にゆかりのあるものが、みずばらしくみえてしまう。管理所が後ろにびたりとあり不調和なアートのようなもので備えた空間が広がる。
中央公園		①③	・民間信仰などのない文化財。どこか粗末に放置されているようで、さみしい。これは千葉の特徴にも感じる。
	中央公園	3	・中央公園。公園なのになぜか落ち着かない。狭いけど大きなモニメントがある。
	栄町公園	1	・空地ですけど、利用できない。草も深いし。
道路・道路付帯施設	駅前通り	6	・歩道を広げただけで休む場所がない。
	五差路交差点	2	・駅前大通りには人通りも多くなく、自転車も無秩序に置かれている。有効に活用を図る必要がある。
	モノレール下	2	・交差点。花壇が一見きれいに見えるけど、座るものがなくもったいない。
駅前広	千葉駅前	2	・モノレール下のスペースがほとんど活かされていない。
		②	・駅前に圧迫感があり、息苦しい。ところ、ところで、目がやすまる場所が欲しい。
	栄町駅前広場	4	・地下街に腰を下ろせるスペースがない。
社寺	院内宝幢院	2	・きれいなポケットパーク風のスペースだが、人が腰かけられるようなベンチ等がなく、落ち着かない。(上をモノレールが走る関係もある)
	千葉神社	1	・ペンディングマシーン(飲み物系)が並び、人のぬくもりのない冷たい空間になっている。
		①	・寺院内に入るのをためらってしまう門がまえと雰囲気がありもったいない気がした。
空地	空地	2	・千葉神社前、朱がベンチ(たぶん)であったり、建築に風情がない。
		②	・栄町の商店街の裏で囲まれた空地。ポケットパーク的に利用できれば、商店街のいいスロースペースになりそうだけど…。
		③	・そごうの横の広場に腰を下ろせるスペースがない。
公共施設	県物産センター	2	・物産館が七日、休日、休みでどうするのだろうか？
	セントラルビル	1	・セントラルホテルがゴーストビルとなり雰囲気や暗くしている。
	河川	③	・河川が汚れている。
全体	全体	2	・どこにもゆつたりしたベンチがない！
		②	

(2) 幕張旧市街地

○ポジティブなスロースペース (件数欄①②③は参加者グループの順位づけ)

道路	路地	12	・住宅街。路地の曲がり角に、なつかしきを感じる表情。時折、道幅にもゆとり。何気ないやさしい表情。
住宅地	家屋	③	・細い路地。車は通らないし、ちょっとした植え込みがあって…。どこかの庭から水の流れる音も…。
		①	・水場のある庭で、屋根にはすずめ。そこで、ゆつくりとした時間を過ごすおばあちゃん。
	境・生垣	2	・ととのった住宅街の中、竹やぶと雑木の中にうもれて少し口かけた平屋。雑木の中のピンクの梅が印象的。こんなところが地域の集会場だったら…
商店街	商店街	10	・鳥を呼ぶためのみかんなどがさしてあり、ホッとする空間。
		②	・幕張銀座通り。車がほとんど入ってこないで、ゆつくり歩ける、立ち話ができる。
	運動広場	6	・なぜか落ちつくセブンイレブン。隣には松。
空地		②	・火が使える一煙がのぼる→風を感じるゆつくりした動きを作る。
		①②	・ええかげん整備で、かつてに庭にしている人もいてオモシロイ。
	空地	3	・子供が遊べる広場。ポッカリ開いた空間です。
石碑	石碑(昆陽碑)	3	・花見川沿いの空地。小さな自然が息づいている。
		①	・昔ながらの良い場所。
	塚・石仏	1	・旧道沿いのお墓。明るくて幕張を感じる竹、貝…。
河川	花見川	3	・眺めが良い。ゆつたりしている。(川沿い)
		①	
	橋の下	2	・秘密のティールーム。
交通施設	踏切り	3	・チンチンと鳴る音にノスタルジーを感じさせてくれたふみきり。
	公園	③	・誰でも利用できる憩いの場所。
	特定街区公園内公園	③	
駐車場	駐車場	1	・人にやさしい駐車場。樹木と敷石。
	樹木	1	・昔、海が近かった名残？松林が少し残っている。
	人物	1	・漁師の生き残り。がんこ者がマチを守る。
廃屋	病院廃屋	1	・病院。昔、なつかしさが良い。
		①	

●ネガティブなスロースペース (件数欄①②③は参加者グループの順位づけ)

空地	空地(事業用地)	12	・再開発事業用地。なぜフェンス？なぜお花や野菜を育てちゃいけないの？(3)
運動広場		①①	・駅前。フェンスで囲まれ殺風景。もう少し有効活用を。
		①②	
		4	・さびしいところ。閉鎖的な感じ。
道路	路地	5	・グランド周囲の空地。雑草やゴミが目立つ。
		③	・道路が細くてくちゃくちゃ。
		③	・車が通らないのでキョロキョロみられるけど、これって救急車も消防車も入らないってこと！？
石碑	千葉鎌ヶ谷松戸簗	5	・道路の渋滞やせわしなさが悪い。車の往来が激しくあぶない通り。
	石碑(昆陽碑)	4	・昆陽の碑のよこにあった新しい石碑(前県知事が書いた碑)のムダな空間。
	塚・石仏	1	・昆陽の碑。塀と門で閉めきっちゃって、誇れるものなのにもったいない！！
商店街		1	・旧道沿いのおほか。歴史を感じさせる大きな一本の木、墓碑など。入り口あたりの小さなスペース。もう少しホッとできる場所に？
	商店街	3	・子供達は商店をつがいない。
		③	
河川	花見川	3	・花見川。親水性に乏しく、水が汚い。
		③	
		③	
交通施設	跨線橋	2	・跨線橋のあがり口。フェンスで囲まれた場所はゴミ捨て場。だれかお掃除をして花を植えて、ベンチでも置きましょうか？
	歩道橋	1	・この横断歩道橋は死んでいる！
		①	・下水道が通っていないのが気の毒！
住宅地	再開発事業地区	2	
	境・生垣	1	・いぬまきの生垣。守れるかな。伝えたいな。
	地割	③	・新しい道路と鉄道が地割を破壊。
農地	特定街区公園団地	1	・幕張の町には異質な雰囲気の高層マンション
		③	
	畑	1	・畑、汚い。ピンやビニール、雑草だらけ。汚いのでスロースペース紙一重。
緑地	緑地	1	・暗い緑地。せつかくの緑地なんだけど、なんだか暗い。
		①	
廃屋	病院廃屋	1	・病院。さみしさが良くない。寂れている気がする。
		①	

としていくつかの範例の写真^{注9}を示した。各ワークショップでは4～6人の班に分かれて現地を歩き、その後、地図に観察した記録をカードに書いて貼り、グループで討議してKJ法的に発見した事柄をまとめていった。そして最後にベスト3、ワースト3を書き出しタイトルを描くという方法で行った。スロースペースには「落ち着きのある」というポジティブな評価と、だらだらしたというネガティブな評価があることが提起されて、ネガティブな面では「だらだらした」、また「生かされない空間(デッドスペース)」という意味も付与されている。

表2にワークショップにおいて出された意見を整理し、また参加者グループが検討した順位づけも記した。グループの順位づけは個人カードの多さと一致している部分もあるが、必ずしも全て一致しているわけではない。このまとめも参考にしながら参加者の指摘を「」書きでとりだして以下に傾向を分析する。

<歴史的シンボル>幕張地区の昆陽神社など歴史的逸話と絡めて地区のシンボルとなっている場の評価は高い。これはグループ

の順位づけと個人カードの多さも一致する。「弁財天。数千百年の前からの霊地を感じさせるポイント」など歴史的シンボルは当然のごとくあげられるが、「民間信仰などのない文化財。どこか粗末に放置されているようで、さみしい。」といった指摘もあり「千葉神社前、公園、モダンアート？らしきものが中国風不思議な水場が不調和。」など、歴史的文脈を断ち切った隣接地や周辺のデザインの問題が指摘された。

＜公園＞スロースペースとして評価が高かったのはどの地区でも大きな公園である。中央公園についてはイベントの多さと人が様々に休憩している点の評価が高かったが、一方に、鳩の問題や、落ち着きが無いといった問題も指摘されている。

＜河川＞河川については必ずしも個別カードが極めて多いわけではないがグループの検討では上位に選ばれていた。海岸部からつながる水辺にスロースペースの雰囲気を感じるという指摘があり、緑と水のつながりで、河川沿いに気楽に歩けるような期待が込められる一方、水質の汚れの指摘がある。旧幕張地区ではH川の橋下の河川敷にテーブルと椅子、さらにカップのセットが置かれていた。ホームレスの場と推定されるが、川と頭上の道路の速度の位相差、そしてモノのリサイクルという点で、スロースペースにあげられていた。

＜空き店舗、空き地＞空き店舗や空き地のデッドスペース化の指摘もグループおよび個人ともに多い。それらを暫定的にでも活用できたらというアイデアも寄せられている。旧幕張地区では市街地再開発事業の構想（1980年）から20数年経ても進まず、先行的に買収した土地が空地のまま周囲を高いフェンスで囲われた状態で長く置かれている（10数カ所計約3000㎡）。事業予定地の中には、市民菜園の利用も密に行われている例がみられた。公共用地の私的利用となり、管理者との軋轢があるが、暫定的な空地の有効利用がNPOなり公的受け皿によって担保されればマイナスからプラスのスロースペースとなると議論された。

＜商店街・道路＞繁華街の猥雑さへの評価がある一方、大通りについては「歩道を広げたくれど休む場所がない」と単なる通行だけの殺風景さがスロースペースとしてマイナス要因と指摘されていた。一方、幕張地区では路地の雰囲気への個人の評価は高かったが、グループでの検討ではそれほど高順位に選ばれていない。

＜店舗＞店舗がそのインテリアのみならず、道路側のエクステリアを開放的にしている例や昔ながらの店構えの商店がスロースペースとして指摘されていた。「店先に等身大のテディベアのベンチ」と指摘されたベンチは店舗の開店前から店舗をシャッターで閉じることなく、視覚的なつながりを保っている点が評価された。また開放的なギャラリーも同様に評価が高かった。

＜駅前広場＞千葉駅前についてはスロースペースとして若者のストリートミュージックへの評価が多い一方、「駅前に圧迫感があり息苦しい。ところどころで目がやすまる場所が欲しい。」「猥雑さが活用されていない」などの批評もある。駅前再開発ビルのオープンスペースについては水の流れへの評価と「横の広場に腰を下ろせるスペースがない。」というマイナス評価との両面が指摘されている。またモノレールの足下利用にも問題が指摘されているが、「栄町駅前広場。違法駐車でだいなし」というように結節点にゆとりのある魅力的な場をどうつくるかが課題ともいえる。

＜街区のテクスチャー＞平成12年に市街地再開発事業の事業認定された幕張駅南側の地区は当初は幕張新都心の玄関口として再開発が構想されたものの事業が20年以上も滞り、その姿は「古い家や生垣。細い路地裏。人のいとなみの記憶が感じられる」とスロースペースの典型として指摘された。特にイヌマキの生垣、民家と納屋が庭を囲ったたたずまいや所々に残る黒松の屋敷林はかつての海辺の漁村の名残を感じさせる景観となっている。この時間の連続性を伝える街区のテクスチャーをいかに生かしてい

くべきかが課題として指摘された。

（２）配表調査にみるスロースペース

スロースペースにはポジティブとネガティブな受け止め方があることから、ワークショップで得られた結果を確認する意味で配票調査を実施した^{注10}。速度と空間という検討から、「最も早く進むように感じられる」「心地よいおちつきとゆったりした気分」「<だらだらした>と感ぜられる」という形容で表現される場所をあげてもらった。表5～7は指摘された2件以上の場所を示したものである。概略を述べると「時間が最も速く進む」と感じられる場所としては千葉駅前と再開発事業エリア、幕張新都心があげられている。特に大学生の指摘が駅に集中している。「心地よい落ち着きとゆうたりした気分」としては中央公園や千葉公園、千葉港公園、海浜公園といった公園と海岸部があげられた。配票調査では公的な都市空間と記してあるにも関わらず、大学生は「自分の部屋」をあげる者が多かった。一方、「だらだらした」と感じる場所としては衰退している商店街と同時に、「時間が最も速く進む」と指摘された駅前も多くの方が指摘していた。この点もワークショップの結果とそれほど大きな違いがない点を確認できる。

表－３ 配票調査概要

１）性別回答者数 ２）居住地別回答者数

	性別				居住地別				
	男性	女性	全体		千葉市中心部	市内中心部以外	市外	不明	計
一般層	50	18	68	一般層	32	27	8	1	68
	73.5%	26.5%	100.0%		47.1%	39.7%	11.8%	1.5%	100%
大学生	18	53	71	大学生	21	22	27	1	71
	25.4%	74.6%	100.0%		29.6%	31.0%	38.0%	1.4%	100%
全体	68	71	139	全体	53	49	35	2	139
	48.9%	51.1%	100.0%		38.1%	35.3%	25.2%	1.4%	100%

表－４ 年齢（～歳以上）

	15～	20～	25～	30～	35～	40～	45～	50～	55～	60～	65～	不明	全体
一般層	0	4	1	9	25	9	10	8	0	1	1	1	68
	0.0	4.3	1.5	13.2	36.8	13.2	14.7	11.8	0.0	1.5	1.5	100.0	
大学生	3	55	8	5	0	0	0	0	0	0	0	0	71
	4.2	77.6	11.3	7.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	
全体	3	58	9	14	25	9	10	8	0	1	1	1	139
	2.2	41.7	6.5	10.1	18.0	6.5	7.2	5.8	0.0	0.7	0.7	100.0	

表－５ 時間が最も速く進むように感じられる場所

一般層 68人		大学生 71人	
1 千葉駅・駅前	14	1 千葉駅・駅前	33
2 富士見町	5	2 そごう等デパート	7
3 千葉駅前通り	4	3 電車の中	4
4 そごう	2	4 幕張	3
4 幕張メッセ、新都心	2	5 ヨドバシカメラ	2
4 混んでいる時の交通量の多い交差点	2		

表－６ 心地よい落ち着きとゆったりした気分

一般層（中央公園にて）68人		大学生 71人	
1 中央公園	10	1 自分の部屋	7
1 青葉の森公園	10	2 千葉公園	6
3 千葉公園	9	3 海浜公園（稲毛、幕張）	5
4 千葉港公園（ポートタワー含む）	6	3 中央公園	3
5 猪鼻山	2	5 千葉港公園（ポートタワー含む）	3
5 天台スポーツセンター	2	5 図書館	3
5 美術館	2	5 西千葉駅	2
		5 千葉大	2
		5 ペリエ（駅ビル）	2
		5 青葉の森公園	2

表－７ <だらだらした>と感ぜるような場所

一般層（中央公園にて）68人		大学生 71人	
1 栄町	7	1 千葉駅前	11
2 千葉駅前、ソゴウ周辺	5	2 千葉大西千葉キャンパス	5
2 市役所内一部（県庁も）	5	3 パルコの通り	3
4 富士見町	3	4 自分の家	2
5 銀座通り	2	4 ペリエ	2
5 中央3・4丁目	2	4 ファストフード店内	2
5 中央公園	2	5 駅（一般）	2

（３）現地踏査と聞き取り調査より

配表調査やワークショップで指摘された場所について現地踏査を行い、市街地整備との関連の高い空間については関係者に聞き取り調査を実施した。特に環境の変化による時間性が住民の意識の中にどのように入っているのかという点についてさらに追究することを意図して行った。その中でここでは中心部の市街地再開

図-2 S地区 再開発エリア

発事業に関連した聞き取り調査の結果を記す。

時間の速さと停滞の二面性が指摘された千葉駅前の市街地再開発事業をとりあげ、その計画プロセスとオープンスペースの管理などについて関係者に話を聞いた。まず、この事業で移転したS地区自治会の役員に話を聞いた。神社や自治会館の移転先は二転し、S公園の前となった。このS公園は草の原っぱ状の広場に遊具が片隅に置かれている、シンプルな形態である。その中に1本、榎の大木がある。この公園は昭和30～40年代に区画整理が行われた時に、元墓地のところを公園にしたものである。区画整理時に元墓地にあったこの榎の大木は住民の意向で切らずに残させたという。自治会役員のO氏は「子どもの頃、枝の実を鉄砲に入れて遊んだ。墓地の面影が残る唯一の木」という。そこからO氏は子ども時代には家で裸になって海岸まで走って海に入っていたと子ども時代の話に記憶が連鎖していった。まだ埋め立てる前の海岸が近くにあった半農半漁村時代の風景の記憶を語る。一代の間での急激な都市空間の変化とも言えるが、榎の木がその記憶素子として働いている。これはワークショップで得た地割・街区のテクスチャーにスロースペースの要素が抽出されるという傾向を住民側の意識面から裏付けるものである。

S地区の自治会の参加世帯数は再開発前には約300所帯であったが今は106所帯という。夜間人口はその半分程度という。役員は皆70歳以上の構成である。地区の小学生が現在6人、中学生が3人と少子化が進んでいる。会館内には大人用と子供用の神輿が展示されているが、外でかつがれることはない。

一方、S自治会のあった再開発事業地区（1996年事業完了）には、その地区の歴史を伝えるものはほとんど無い。神社のあった所も形跡はない。ここでは総合設計制度と抱き合わせであり、公開空地の造形において、デザインコンセプトは紅葉と滝など山の原風景の再現という。当事業はモノレール駅と抱きかかえなど複雑な関係の調整に神経が注がれ、その大事業を成し遂げたこと、およびオープンスペースは面積としては余裕をもって設けている点を行政および計画者は評価する（行政の担当および計画者の話より）。実際にはモノレールの橋脚の位置が道路になることから斜線制限が発生し、その対処としての総合設計制度の導入であり、公開空地の位置は橋脚の後追的に決まった（計画者の話より）。また大手テナントの意向が公開空地の位置や形態および管理に働き、さらに後に店舗拡大で公開空地の縮小が行なわれたりした。公開空地にベンチがあまりない点や滞留のにぎやかさが少ない点については、自転車駐輪、浮浪者対策という管理面からの対処という（管理担当者の話より）。

地域の居住者が記憶という時間性の中で現在の都市空間を語る同様の例はもう一つ中心部のT地区の再開発事業（1991年事業完了）にからむ自治会からも聞かれた。ワークショップでも賛否両論の意見があった歴史的神社の前のアートオブジェの公園について聞いた時であった。この抽象的なオブジェが林立するデザインへの改修のなされる前は土の広場、樹木が豊富で噴水の水辺があり静かな公園であったという。この地は昭和20年7月に一帯が焼ける前は墓地であったという。戦後の区画整理で元墓地の活用として千葉市で最初の児童公園となった。地区ではこの公園を使って祭りや盆踊りなど様々な行事がなされていた。

しかし再開発事業の仮店舗の場所としてこの公園が使われ、その後に公園改修がなされた。公園の整備は住民に相談が行

われたわけではない。「たぶん町会長には話しがあったのだろうが、会長は決まったことを言い、会員は誰も文句を言わないのが当時の町会。ある日突然、今の形に整備するという話で」と、その一方的に人工的な形態へ整備した不満も住民から聞かれる。唯一、要望で実現したトイレが浮浪

者に占拠されたことから、自治会ではトイレの清掃と浮浪者の対策を徹底し、またゴミ問題に対して「ゴミステーション廃止に伴う不法投棄防止監視活動」なる監視を1週間交代で寝ずに行った。住民の積極的な環境問題への対処もこの時を最後に、現在では人口減少の中心地区の課題を抱える。T地区の再開発事業は地区計画と抱き合わせであるが、それは隣地の容積率とのアンバランス解消のための便宜的なもので最小限の区域であった。この仮店舗地となった公園は地区計画に含まれず、当時の「街の中に彫刻を」という政策から、現在の形態の公園へと改修された（行政再開発担当および公園担当への聞き取り調査および資料より）。

以上、市街地再開発事業を例にみると、歴史的文脈の断絶のみならず、地域住民のオープンスペースへの関わりや内部の時間性とも断絶するプロセスのあり方の問題が浮かび上がる。特に総合設計制度や地区計画といった制度との抱き合わせであっても、それが積極的にオープンスペースを意味づけ、歴史的脈絡と将来のビジョンへの誘導策としては必ずしも使われていない。その点に時間性を含めた概念であるスロースペースという概念を注入する意味があろう。

4. まとめ

①認識論の検討から、スロースペースは速度と空間が一体となった概念であり、それは地域固有の歴史、風土を表し、その相対的な遅延や位相差という差異やズレが、人の「生きられる」経験等身体的内部にも働きかけ、世界（環境）との関わりや主体性を喚起するドラマトゥルギー的抱握が契機される空間といえる。

②ワークショップや配表調査調査によると、スロースペースには「落ち着き」といったポジティブな評価と「だらだらした」というようなネガティブな評価の受け止め方があり、ワークショップの結果によると i) 開発の位相差による相対的な価値評価が働き、開発から遅れている地区の空き店舗や空き地等が注目される。ii) ポジティブな評価では河川や公園といった自然的要素を備える広がりのある空間、地割や街区の部分のテクスチャーとして現れる歴史性、および座れるといった滞留的要素を含む開放性、iii) ネガティブ評価としては人工的要素、歩みにくさ、閉鎖性、関係の遮断、雑然性、が影響している。またワークショップはこのようなスロースペースの視点から都市空間を見直すにあたり、参加者にとって環境への主体性を喚起するドラマトゥルギー的效果を有することが確認された。

③スロースペースに関して市街地整備に関連した関係者への聞き取り調査結果も加味して鑑みると、居住者は街の環境変化には受身的であるし、また未来の予見にも消極的である。市街地再開発事業など都市整備もそのように地区の歴史性と断絶のみならず住民の内部の時間性との断絶もみられる。しかし、住民の過去の記憶の内的時間においては、その断片でも空間的に存在するならば積極的に環境へ関わった時間と空間が想起される。それが主体性回復への契機となるには、さらなる仕掛けやドラマトゥルギー的な要素が必要とされる。開発の速度の位相差から生じるスロースペースにおいて、その位相差を逆手にとることも都市空間の整

図-3 T地区 再開発エリア

備として検討に値する。

謝辞

本稿は平成 12 年度千葉市大学等地域連携推進事業補助金による研究「都市のデッドスペースおよびスロースペースの特性と活性化に関する研究」および平成 13 年度科学研究費補助金研究「市街地再開発事業における計画参加課程からみた公開的空地の形態と運用に関する研究」の研究成果の一部に基づく。調査では NPO 千葉まちづくりサポートセンター、千葉市役所関係課をはじめ地元自治会や商店会、JC、関連企業、専門家その他多くの方々にお世話になった。この場を借りて心より感謝の意を記す。

注：

- 注 1 「時間性の脱自的統一の視界的構え(地平的構造)にもとづいて、そのつどかれ(おのれ)の〈現〉(Da)である存在するものに、開示された世界といったのが属している」とハイデガーはいう(ハイデガー(桑本務訳)：「存在と時間 下」岩波書店、p.120(原 366))。過去の記憶や未来の予見といった過去、現在、未来という時間の次元を開き、脱自的に遠く離れてみて環境世界にいる自分の存在を理解することができるという意である。
- 注 2 ハイデガーはこの概念を 1928 年の講義ではじめて持ち出し(「論理学の形式学上の基礎—ライブニッツから出発して」)、これは「時間性の諸脱自態の地平図式」と同じと木田は分析する¹⁰⁾。
- 注 3 「感じ一つまり、積極的の把握は一は本質的に、合成を惹起する移行である」といい、その感じの複合的構造として次の 5 つの要因をあげる：①感じる「主体」、②感じられうる「最初の予件」、③消極的の把握による「除去」、④感じられうる「客体的予件」、⑤その主体がその客体的予件をいかに感じるかの「主体的形式」、である¹⁷⁾。ホワイトヘッドの身体性はメルロ・ポンティの「知覚」と「身体」とも呼応する¹⁸⁾。
- 注 4 今日のポスト構造主義においては、デリダがフッサールおよび現象学について「言葉」と「ありのまま」とのズレが避けられないと、形而上学も現象学も「ロゴス中心主義」の同じ系譜に位置づけて批判した「脱構築」論¹⁹⁾や、ドゥールーズ(&ガタリ)の「リゾーム」、 「多数多様体」、 「器官なき身体」など²⁰⁾の記号論から分析した批判もある。しかし、デリダの「脱構築」のような、批判的な解体論のあと、言葉の語り方を問題にし、差異があるのみという中心の逸脱の先は見えない。しかしながら、ドゥールーズの「ツリー」対「リゾーム」の概念はホワイトヘッドの有機体論的に関係性に着目した視点につながり、どちらもベルグソンの影響を受けている点からも共通性がみられる。
- 注 5 西田幾多郎は『善の研究』の中で次のように言う。「経験は時間、空間、個人を知るが故に時間、空間、個人以上である」²¹⁾。また「動機の原因が自己の最深なる内面的性質より出でた時、最も自由となるのである」²⁶⁾とも言い、また『場所』の論の中で次のように言う。「空間も、時間も、力もすべて思惟の手段と考えられた時、与えられた経験其者の直に於てある客観的場所を超越的意識の野という如きものでなければならぬであらう」²⁷⁾。
- 注 6 和辻は次のように言う。「人間存在の空間的・時間的構造は風土性・歴史性として己れを現わしてくる。時間と空間との相即不離が歴史と風土との相即不離の根底である。・・・精神が自己を客体化する主体者である時にのみ、従って主体的な肉体を含むものである時にのみ、それは自己展開として歴史を造るのである。このような主体的肉身体性とも言うべきものがまさに風土性なのである。人間の有限的・無限的二重性格は人間の歴史的・風土的構造として最も顕わになる」²⁸⁾。なお、和辻この記述は 1929 年であるので、主体の身体性に着目している視点はメルロ・ポンティより先んじている。しかし和辻がこだわったのは風土の型であり、メルロ・ポンティやホワイトヘッドらの言うところの関係の網としての空間との関わりではない。
- 注 7 西田は「フッサールの知覚的直覚というのは一般概念によって限定せられた場所に過ぎない。真の直覚はベルグソンの純粹持続の如く生命に充ちたものでなければならぬ」²⁹⁾という。
- 注 8 西田は「包摂するというのは、特殊なるものを主語にして、一般なるものをこれについて述語するということである」³⁰⁾という。
- 注 9 写真は下記の内容である：童話モモ(M. エンデ)の円形劇場、徳島市ポケットパーク(木の下の石の上で座り新聞を読んでいる風景、ベンチで昼寝するサラリーマン)、徳島市 NPO の運営するひょうたん島一周無料遊覧船発着所、葛飾区立石駅前市場、同店舗のシャッター絵(店舗と自転車が過ぎる絵)、柏駅前広場のストリートミュージシャン、御用水路を再現し歩行者優先道路に再整備された飯田市りんご並木、千葉市の総合設計制度によって整備された公開空地(3点)、千葉市 S 地区自治会会館前の大棟のある S 公園、千葉市 T 地区児童公園脇の千葉常胤像と像設置者の説明看板。写真が、参加者に与える影響は全く否定はできないが、川や空地、生垣、踏み切りなど写真以外

の要素も多いという結果からみると、参加者が写真に規定された影響はそれほど大きくないと考えられる。

- 注 10 配表調査項目はケビン・リンチがボストンで行った項目を参考(文獻 21)にして改良を加えたが、「過去を思い起こさせるもの」としては学校に次いで海岸部、一方「未来を想起させるもの」としては幕張新都心があげられる程度で、十分な知見は得られなかった。

参考文献

- 1) I.Kinoshita&O.Nakamura (1997): A Study on Characteristics of Open Space Constructed by the Urban Renewal Project in Japan, The City Planning Institute of Japan, International Symposium on City Planning Proceedings, 89-88
- 2) Michael Bell & Sze Tsung Leong (1998): "347Years: Slow Space", "SLOW SPACE" The Monacelli Press, Inc. and The Future Project, pp.15-24
- 3) 南部繁樹・材野博司(1994):市街地再開発共用空地・空間の計画者から見た空地規模および形態別のアメニティー評価:日本建築学会計画系論文集第 456 号, 199-208
- 4) 沖塩・塚田他(1983):公開空地の実態に関する研究—その 1. 滞留と通り抜け空間, その 2. 管理運営:日本建築学会大会学術講演梗概集, 2017-2110
- 5) 岡田昌彰(2001):産業廃墟景観論・試論:日本造園学会ランドスケープ研究 64(5), 765-768
- 6) 辻信一(2001):「スロー・イズ・ビューティフル」:平凡社
- 7) 島村奈津(1999):『スローフードな人生—イタリアの食卓から始まる』:新潮社
- 8) 例えば前掲書 2)における下記の論文: Dana Cuff "Community Property: Enter the Architect or, the Politics of Form", pp.120-145, Albert Pope "The Unconstructed Subject of the Contemporary City, pp.160-185, Sze Tsung Leong "Readings of the Attenuated Landscape", pp.186-213, Bermann, Centuori & Preston "Burn", pp.426-433, Aaron Betsky "Nothing But Flowers: Against Public Space", pp.472
- 9) 例えば前掲書 2)における下記の論文: Lars Lerup "Double Space", pp.26-42, Alvaro Siza & Peter Testa "Still Architecture", Micahel Bell "Having Heard Mathematics: The Topologies of Boxing", pp. 78-119, Elizabeth Burns Gamard "We Play Until Death Shuts The Door", pp.284-317
- 10) ベルグソン.H (1889): (平井啓之訳 1965)『時間と自由』:白水社
- 11) ミンコフスキー.E: (中江育生・清水誠訳 1972)『生きられる時間』
- 12) カント.E (1787): (篠田英雄訳 1961)『純粹理性批判 上』:岩波書店, 88-89 (原 36-37)
- 13) ハイデガー(1927): (桑本務訳 1960)「存在と時間 下」:岩波書店, p.123 (原 368)
- 14) ハイデガー(1928):「論理学の形式学上の基礎—ライブニッツから出発して」, p.396
- 15) 木田元(2000):「ハイデガー『存在と時間』の構築」:岩波書店, p.125
- 16) ハイデガー:前掲書, p56(原 329)
- 17) ホワイトヘッド.A (1928): (山本誠作訳 1985) 過程と実在(下): 松籟社, p.402
- 18) ポンティ.M (1945): (竹内芳郎・小木貞孝訳 1967)『知覚の現象学』: みすず書房
- 19) デリダ.J: (若桑毅ほか訳 1977)『エクリチュールと差異』: 東京大学出版会
- 20) ドゥールーズ.G (平井啓之訳 1989):『差異について』: 青土社, ドゥールーズ&ガタリ: (宇野・田中・小沢訳 1994)『千のプラトール』: 河出書房新社, ドゥールーズ&ガタリ: (市倉 宏祐訳 1986)『アンチ・オイディプス』: 河出書房新社
- 21) リンチ, ケビン (1972): (大谷幸夫他訳 1974)『時間の中の都市』: 鹿島出版会, p.90
- 22) リンチ.K (1960): (丹下健三・富田玲子訳 1968)『都市のイメージ』: 鹿島出版会
- 23) リンチ.K: (有岡孝, 駒川義隆訳 1994)『廃棄の文化史』: 工作舎
- 24) ソーラーシステム研究グループ(1994):『循環都市へのこころみ』: NHK 出版, p61
- 25) 西田幾多郎(1910) 1950:『善の研究』: 岩波書店, p35
- 26) 西田, 前掲書, p142
- 27) 西田幾多郎(1927) 1989:『場所』, 上田閑照編 西田幾多郎哲学論集: 岩波書店, p102
- 28) 和辻哲郎(1935) 1963:『風土』岩波書店, 15-16
- 29) 西田(1927) 前掲書, p.127
- 30) 西田(1927) 前掲書, p.134
- 31) 西田(1910) 前掲書, p.116
- 32) ボードリヤール.J: (今村仁司・塚原史訳 1979)『消費者会の神話と構造』: 紀伊国屋書店
- 33) トクヴィル.A (1840): (岩永・松本訳 1972)『アメリカにおけるデモクラシー』: 研究社